

竹園抄とその前後

Tameaki's *Chikuenshō*

リユーベン・ゲーリング*

Abstract

Tameaki's *Chikuenshō* is a poetic treatise which was written at a time of great changes in the history of Japanese Court Poetry. After the death of Teika there developed three schools each claiming to have inherited the true teachings of that great master. Tameaki's work, although not one of the more important and well known ones, seems to have exerted great influence on the ideas of poets in the generations to come. The author is a son of Tameie, Teika's son who says he has inherited the knowledge included in the work from his father who had taught it.

The *Chikuenshō* had been particularly influential on *Renga* poets. We find ideas first expressed in this work reiterated by such well known masters as Bontōan and Shinkei. Especially Bontoan's *Chōtanshō* is noteworthy since its first (out of three) volume is almost a copy of the

※ Reuben Gerling [現職] 上智大学大学院生

Chikuenshō.

In addition to the above the *Chikuenshō* also must be noted for the fact that it contains quite a few expressions which cannot be found in other works. The names it gives the poetic diseases, and the names of its poetic moods are an example of this.

Finally we find in the *Chikuenshō* two interesting chapters about poetic practices of the day. These are the one concerning poetic composition and the one about inscribing poetry on special paper used for the occasion.

今回私は1つの歌論を見て、その前駆となっている歌学書及びその影響を受けた歌学書又は連歌論書を比べようと思っています。但し短い歌学書である「竹園抄」の場合でさえそれを全部行うことは出来ませんので、ここで述べたいのは次の点です。

1. 竹園抄の11項目の中、4項の事。
2. その影響を受けた主な連歌論書及び歌論書。猶、時間が足りませんので例歌の事及び注釈を簡単に紙に書いて配りましたので御覧下さい。

竹園抄の著者といわれている為頭は、為家の子であり母は内侍です。歌人として名人とは言えませんが、勅撰集には7首、又連歌「菟玖波集」に2首、歌合としては日吉社歌合、同じ弘長三年の玉津島歌合、又弘安元年の弘安百首の作者名の中に名が見られます。「新拾遺集」撰進以前「貞治元年」に出家したと思われますが、その当時に歌論書「竹園抄」は成立したと思って良いでしょう。「竹園抄」の著者は為頭か（群書一覽説）、又為実か（落書露頭説）、それとも偽書か（佐々木信綱博士）という問題があるが、ここでは久松博士

の「為顕著と考えてよい」という意見に一応同意します。

猶、歌論書として「竹園抄」は余り長い歌学書でもないし、定家・長明・清輔等の著書と比べると多分価値は高いとも言えないかも知れません。但し、この「竹園抄」としては次の特徴があるので注目すべきであると思います。

1. 時代的に鎌倉末期であるので、和歌史を考えると、古今伝授に関して3つの流派に別れた時期です。
1. 連歌史としては、「竹園抄」が成立された時期は連歌の最盛期から百年も離れていません。連歌の最も優れている歌人の先駆者及び彼らの師となっている二条良基は「竹園抄」を読んだ可能性もあり、又その弟子梵灯庵が其の影響を受けたことは確かです。
1. 当時の和歌作法・懷帑に就いては詳しく記しています。

「竹園抄」の項目は11であるが其の中から先ず、第1「歌病事」に就いて申し上げたい。猶、同項の事は久松博士が詳しく論じましたので、ここでは省略しますが、但し次の点について注意していただきたい。

1. 為顕の歌病は、内容としては他の歌論書の病と似ている所もありますが、病名は1つを除くと他の歌学書にはのっていません。
2. 歌論書によって、歌病の数が変わることがある。いわゆる四病八病等がある。それは皆「文鏡秘府論」の29の中から幾つかを選んで、それに就いて解いた訳であるが、但し空海の後に来る執筆者は先ず彼の最初の9の病しか扱っていないし、又その中からある数を選び固定し、それらの事をそのまま放置して解説します。例えば、「奥義抄」には3ヶ所も出て来る七病・四病・八病の様なことです。それを考えると、為顕の文章「古人おほく歌の名をつく、いわゆる四病・八病等也」はどういう意味を持つのか、つまり自分はその他の歌論に書いてある歌病を認めながら、別の6つの病について述べようとするか、又は他の四病・八病等全体から6つを選んで述べようとするか。もし后者であつたら私が先に申し上げた1.は特に問題であると思います。

次に、2項目を纏めて、それらについて述べたい。それは2. 対詞事、3. 親句疎句事及び5. 本歌取事であります。

中世和歌の場合、特に新古今とその後を考えると、三句切の問題は重要です。それは、久松博士も「新古今集の歌が三句切が主になって、上句と下句とが離れるようになり」と記しました。猶、萬葉集には四句切が多いが、それから中世時代となると三句切の歌が多くなりました。それはもう守部の歌格論に書いてありますが、近頃、和泉・世良両氏は詳しい研究を発表しました。和泉さんは、新古今の「帰りこぬ昔をいまと云々」の例を上げて、その本歌は古今の「五月まつ花橘云々」と比べています。それで先ず、「意味の上では切れないものである」と述べ、続きは「上句は主観体、下句は客観体と上下の句の表現を分けて考えることが可能になっている」と氏は述べています。世良さんもその三句切に対して、上下の句を考え、氏は三句切の場合には上句に事実を詠むと、下句に展開となる。又その逆も可能であると論じています。

句切という言葉を使うと、すぐ親句疎句の事のみを考えている方もいますが、此所には「対詞」及び「本歌取」とも関係があると思っています。

先に和泉氏の論文を少々引用しましたが、同じ二首の事を考えてみますと、新古今の歌の上句には本歌の「昔」を取ってあります。又その下の句には本歌の「花橘」は「にはふ橘」となっています。それについて和泉さんは『本歌の言葉「昔」を含む句と「たち花」を含む句は切断しているものの様にそれぞれに意識される』と言っています。これをみるとやはり昔の連続だけではなく、上下の詞はどういうふう合っているか、又は本歌を取る時その本歌からどの位取っていいか、及び取った言葉はどこに入れるかも問題です。「竹園抄」には「上に櫻とあらば下に句ふとも、咲とも、散とも云々」と書いてあります。その非常に正式的な詠み方に対して、石田さんは、定家の対句に就いて「奔放な句法」と呼び、又は「顔唐的気分」として定家の歌「雲のうち雪の下なる春の色をたれわが宿の上と見るらむ」を引用します。それを見

るとやはり新古今歌人は新しい句法を捜しながら、対句の事も考え直そうと思ったと考えて良いでしょう。為頭の父、為家も「歌にはよせあるがよき事」と述べ「衣にはたつ・きる・うら、舟にはさす・わたる云々」と「八雲口傳」に書きました。

猶、対詞の場合詞の意味を取って対すること、それに対して親句疎句の場合その音韻を考えて、相通又は連聲の問題になります。それが変るならば、句も切れる様な気になります。「対詞」の項の最後には「上の詞を悉くうけず、上にある木草月花を下の句に對せねども、心ばかりを對する也」とありそれに対して「親句事」の項の最後には疎句体は「ひびきも通はず、詞も切るれどもこのころのはなれる歌也」とあって互いに合っていると考えてよいでしょう。

「竹園抄」はきちんとした謙虚な歌論書です。各項は1、2に別けてあります。2、3ヶ所の例外を除くと、短い説明と1、2首位しか書いてありません。対句の項も本歌取の項もそうであるので、「竹園抄」によって対詞を述べようと思います。為頭は対詞の種類を2つに別けて、その1つは双対であり、もう1つは乱対であります。双対は「頭と首を対し中と中を対し、下と下を對する也」。この詠み方は上句下句の関係が深いことです。又この対詞の項を全体から見ると双対の事が3分の2書いてあります。歌も7首のうち、ここに4首を詠みます。次の乱対の事は2つに別けてあり、1つは「上の句の初めの詞を下の句の終に對して中を上を對し、下を上中に對する也」。これには2首を例歌に挙げてあります。最後の乱対体の「2」に就いては先にもう述べましたので省略します。

次に親句疎句の事ではありますが、ここには親句論が比較的長い。又疎句の所には例歌無し。親句の種類は3つです。その1は五音相通であり、これと2つ目の五音連聲は両方共「ひびきの親句」と呼ばれています。もう1つの親句体は正の親句です。疎句体に就いては、もう申し上げましたのでここでは省略します。

本歌取の事は、石田さんも書いている様に中古の終り頃から中世にかけて

発展したのであります。本歌取詠歌は俊成からのことである。その前には「歌を盗む」という表現を使った。つまり他人の歌詞を引用するのは余り誉めるべきことではなかっただろう。例えば「奥義抄」には「盗古歌證歌」という項があります。但し俊成の後にもこの「盗む」という言葉を使う場面があります。例えば「長明無名抄」の「とこねの事」という項には、長明は「古集の中に様々の姿・詞・一偏ならず（中略）是を本として且はその軀を習ひ、且はその詞を盗むべきや」の様に書いてあるので、新古今時代に入ってから歌人は皆、必ずしも本歌取が良いと思わなかったかも知れません。

本歌取というのは特に定家の名前に関し考えています。「かの本歌を思ふに、たとえば五七五の七五の字をさながらおき、七七の字を同じ続ければ新しき歌にききなされぬところぞ侍る云々」と書いてあります。「近代秀歌」を見ると、やはり定家は先も述べた2つの問題点、つまり本歌のどの位を取って引用して良いか及び新しい歌の何所で詠んで良いかに取り組む。「毎月抄」には「本歌取侍る様は（中略）花の歌をやがて花によみ、月の歌をやがて月にてよむ事は（中略）春の歌をば秋冬などによみかへ」と書いてあります。同じ所に詞の数、又上下に入れることも記しています。それに対して、定家の子、為家は「常に古歌をとらむとたしなむわろきなり」と書いたので彼は本歌取を認めたにもかかわらず「いささか詞をそへたるはすこしもめずらしからねば、ふるものにてこそあれ」と注意しました。

「竹園抄」の本歌取事は4つに別けてそれらは、1. 言葉をひとつにして心をかへ、2. 心をひとつにして詞をかへ、3. 本歌の上下の句をうちかへしてとる、4. 本歌の大意を取る也。1. 2. 3. は余り定家から離れていませんが、4. には「詞かはらずして心ひとつならざる歌」となります。これはどこか「1」の「詞をひとつにして心をかへ」と違うかと言うと、この「4」の場合上句は全部本歌のままです。しかし下句は違いますので結局意味も同じではありません。

従って本歌を取る時、その詞の数及び場所又は一応その本歌詞を使うこと

となったら、それは新しい詞と対して意味的にも、音韻的にも考えるべきです。特に新古今歌人の場合この問題と三句切形と付け合せて一緒に考えました。

もう1つの項目について申し上げたい。それは最後の「風躰の事」です。風體は「歌風」だと思われる。「和歌文学大辞典」には「歌人の個性・集団・時代などそれぞれ固有な歌風とその変遷が認められる」。又同じ所に「歌風」は「六義」の「そえ歌」と同じ事であると書いてあります。それを考えてみると次の点を注目すべきです。

1. 定家十體に比べると2ヶ所位似ている所もありますが他の8ヶ所は関係がありません。
2. 忠岑十體にも1、2ヶ所の似ている所しかありません。
3. 他の歌論書に見られる十體とは関係がないらしい。

「竹園抄」の影響は特に連歌論の場合が多い。「竹園抄」の中でも2項目の所で連歌の事も書いてあります。「懷帛書事」には「歌を書くにも歌の下に名を書くべき也連歌の如し」、それから「和歌講作法」には「連歌酒宴など過ぎては必ず管絃をしてたつべし」というように書いてあります。但しそれだけ見ると「竹園抄」が是にどの位影響を与えたか分かりません。例えば親句疎句の事について為頭が初めて述べ、その後「知連抄」「長短抄」「ささめごと」等の様々な連歌論に見られます。特に「梵灯庵長短抄」の場合には似ている所が多い。それは久松博士の論文にも書いてありますが、金子さんの論文はこれに就いて最も詳しい。氏によると長短抄は次第に和歌から連歌へ発展した、つまり上巻は和歌について、中・下巻は連歌となっています。氏の表を見ると次の結論になります。「竹園抄は全部11項、その中、長短抄に直接関係のないのは第9和歌講作法・第10物名類可存知事の2項のみである」。金子氏も梵灯庵長短抄とその師良基の聞書知連抄を比べています。そして「梵灯庵が竹園抄に依據した結果であって、良基自身與り知らぬところと見たい。この点からも長短抄上巻の特殊な成立事情が考えられる」と氏は述べています。

心敬「ささめごと」には特に親句疎句の説明が詳しい。「ささめごと」の中にはその説明が2ヶ所ある。心敬の親句疎句論について田中さんの論文から2、3点を取りだして申し上げたい。先ず、「心敬の親句疎句の説は恐らく直接には愚秘抄三五記によったのであろうが」と書いてある。次は「彼の場合そこにはいささかも長短抄的な考えは見られずに、問題は一句の姿の上にはなくて、すでに完全に二句間の問題、すなはち付合論に転用され云々」とも書いてあります。「長短抄的」と言うのは、いうまでもなく「竹園抄」的と同じであります。田中さんは「何故に心敬は長短抄の解釈をとらなかったか」と問うています。猶金子氏の言葉を繰返すと「長短抄」は次第に和歌から連歌へ移転しとあります。それをみると今の田中さんの問に対して、多分心敬の解釈のしかたは変っていないが、心敬のはもっと長短抄より完全になった連歌書であると答えられます。

とにかく、心敬はこの親句疎句論を「三五記」いはば「愚秘抄」から取ったかどうか、又この2つの偽書はどこから取ったかはまだ問題が残っています。為顕と心敬の親句疎句論を比べるとやはり似ている所もあるし、それから後者は前者の解説を広げ、連歌に使うこととした場合もあります。「ささめごと」の「歌には疎句に秀歌多し」を「三五記」か「愚秘抄」から引用しているが、これは「竹園抄」の「よくよくてびろなることなるべし読みやすきやうなるべし」との考え方から余り離れていません。又2回目に出ている所には「心の親句、姿の親句、心の疎句、姿の疎句」と書いています。疎句の方は「竹園抄」とは関係がありませんが木藤さんによると「ひびきの親句は、『姿の親句』にあたるものであるが(中略)心敬のいう『心の親句』は『正の親句』の内容をもう1歩広げた所に成立するものである」。

心敬の師である正徹が親句疎句について述べていないのは注目すべきであります。但し正徹は本歌取の事をよく記しています。それは例えば、彼の「上の句をば下句におき、下句をば上にやりて讀むことは常のこと也」は為顕の本歌取の項の「3」「本歌の上下の句をうらかへしとる」と同じと考えてよい。

又別の所には為顕の「言葉をひとつにして心をかへ」に対して正徹が『心も詞も同じ物で侍るは（中略）是は良き也』と逆の説が出て来ます。

討議要旨

井本農一氏（聖心女子大学教授）から、詳しく調べて発表されているのでたいへん参考になったが、ただ、「竹園抄」のような考え方をもっていたのは必ずしも「竹園抄」ばかりでなく、他にも論として発表され、まとまった形となっていたかもしれないので、竹園抄の影響関係を云々する場合、もう少しその周辺の歌論書を調べる必要もあるのではないかとのコメントがあった。